

前々回は、ラオスが電力や資源の輸出で経済成長を高め、証券取引所も開設して市場経済化にかじを切った話を書いた。今回はその続き。成長とともに外国からの投資が続いている。そのなかでも、中国からの支援や投資が目覚ましい。

ビエンチャンの国会議事堂建設は、中国の無償経済協力によるものだ。地デジ・テレビも中国方

ラオスの高速鉄道

東京大教授 伊藤 隆敏



したという。

式を採用することを条件に放送局設置を中国が支援している。さらに、一昨年の東南アジア諸国の総合競技大会（東南アジア・ゲーム）のためのスタジアム建設を、中国が労働者つきで、支援

極めつきが、4月に正式調印の予定である中国・ラオス高速鉄道計画だ。中国の資本と労働力で、4年後までに、雲南省からビエンチャンま

で、中国規格の高速鉄道を完成させる、という。スタジアムや高速鉄道の建設のための10万人規模の労働者に、長期査証を出したといわれている。ビエンチャンにはチャイナタウンもできている。韓国も、証取への出資のほか、電機・自動車を積極的に売り込んでいる。

ビエンチャン市内のマーケットを歩いてみた。伝統的な布地や民族衣装にならんで、冷蔵庫、洗濯機など、家電製品があふれている。日本メーカーのブランド名が書いて

はあるものの、ロゴの形状などから、本物か怪しいものもあった。

人口600万人のラオスは日本企業にとって、小さな市場で魅力に乏しいということかもしれないが、官民あげて、日本資本歓迎なのに、その期待に日本政府・企業が応えていない。東南アジア諸国連合（ASEAN）の市場統合が実現したときには、ラオスをタイ、カンボジア、ベトナム、雲南省への輸出基地にする、という発想があってもよいのかもしれない。